SUBARU

2015 年 10 月 22 日発行 通巻 50 号札幌稲雲高校図書局

知床

世界自然遺産10周年 問題と課題

知床が世界自然遺産に登録されたのは 2005 年のことです。面積 71,000ha、知床半島とそれを取り囲む海域とが対象となっています。海洋が範囲に含まれる自然遺産は、知床が唯一です。半島中央部を火山帯が貫き、海岸線は波に大きく削られ、陸地のほとんどは森林に覆われています。まさしく、日本列島に存在する自然の形の全てが凝縮されていると、言ってしまってもいいのではないでしょうか。

しかし、何故知床は世界自然遺産に登録されたのでしょうか。

知床は「世界で最も南端に位置する、流氷の流れ着く土地」です。毎年、冬になると知床の海は白く覆われます。そして、何より大切なのがこの流氷です。流氷が知床の自然遺産の座を支える重要な要素の一つであり、また、知床の脈々と受け継がれる生態系を支えてきた「起点」でもあります。

流氷には、多くのプランクトンが含まれています。プランクトンは多くの魚にとって大切な餌であり、結果、流氷を追いかけて、サケなどの魚類が南下してきます。やがて季節が秋になると、集まったサケ達が産卵期を迎え、一斉に河川を遡り始めます。それらのサケは、ヒグマやオジロワシといった森の大型の捕食者達の餌になります。そしてサケを食べて生きた彼らも、いつかは寿命を迎えて死骸となり、川を上ってきた海の栄養と共に、森の養分となり次の春夏の芽生えの糧となるのです。

陸域 48,700ha には海や川、森林、高山、湿原までが詰まり、豊かな自然が広がります。シマフクロウ、シレトコスミレ、オジロワシなどの希少な動植物が分布。ヒグマ、エゾシカ、トドなどの大型哺乳類も高密度で生息しています。またオオワシのような渡り鳥にとっても重要な地域となっています。

流氷から始まり、海から陸へとつながる見事な生態系が見られること、絶滅危惧種や希少な動植物の生息地となっていること、そして、これらを保全していくための管理体制が整っていることが評価され、世界自然遺産の一つに名を連ねることになったそうです。

この素晴らしい自然と生きものたちを守るため、さまざまな活動が続けられています。

たとえば、ヒグマ。知床は緑溢れる土地ですが、同時に多くの人々が暮らしているという特異な場所です。知床は最もヒグマの生息密度が高く、そこに住宅地があるのですから、当然、熊出没の危険が伴います。近年は観光客がヒグマに餌をやることで、人から食べ物を奪おうと積極的に近づいてくることもあり、問題が深刻化しています。人間とヒグマの共存を図るため、ヒグマのＤＮＡ調査、モニタリングを行い、その活動範囲や生態を調査し、明らかになった徘徊ルートに電気柵を設置する、不法なゴミを除去するなど接触を避ける活動が行われています。

また、ボランティアを募り森づくりなどの活動をみんなが行うことで、人間側の自然への理解を深めようという試みも行われています。

このように、自然を対象とした世界遺産は、維持が難しく、多くの問題を抱えています。そのため、その価値を保つための活動が行われているか、世界遺産委員会の場でチェックを受け続けることが必要になります。知床も、2008 年の 2 月にユネスコ世界遺産センターと IUCNIUCN（国際自然保護連合）の現地調査を受けました。その結果「良好な管理努力が続けられており、他の世界遺産地域の管理にとってよい手本になる」と高い評価を受けましたが、その一方で課題もまだあるとして、「17 の宿題」が出されました。宿題は大きく五つに分類することができ、エゾシカの管理、海洋資源の管理、サケ科魚類とダムの管理、エコツーリズムの管理、気候変動のモニタリングが示されました。その中でも、気候変動のモニタリングは、注意深い観察を必要とし、将来及ぼされるであろう影響を最小限にする必要があると、強く勧告されました。

「気候変動」とは、すなわち地球温暖化のことです。温暖化による生態系への影響が心配されています。　世界にも認められた北海道の悠大な自然。その最たる世界が、静かに消えていこうとしています。私達は真剣に、自然との付き合い方について考える必要に迫られつつあるのかもしれません。

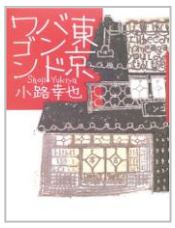
参考：ニュートン 2006.3 月号／知床財団 web ページ http://www.shiretoko.or.jp/
／知床自然センターweb ページ http://center.shiretoko.or.jp/shiretoko/isan/

今をときめく 北海道の作家たち

今月SUBARUは北海道ワールドということでトピックでは北海道で今話題の作家を２人ほど紹介したいと思います。

「ホテルローヤル」
桜木紫乃著
集英社刊

１人目は２０１３年に「ホテルローヤル」で直木賞を受賞した桜木紫乃さんです。桜木さんは釧路市出身の５０歳、裁判所職員を経て現在は専業主婦で２人のお子さんの母です。作家を志した理由は１４歳のとき原田康子の小説を読み自分が普段住み慣れた街を舞台に描かれた作品であることに引き込まれ、普段目にする何気ない景色も作家の目を通すとこのように映るのかと意識させられたことがきっかけだそうです。一冊の本との出会いは人の人生を変えてしまうようなこともあるのですね。

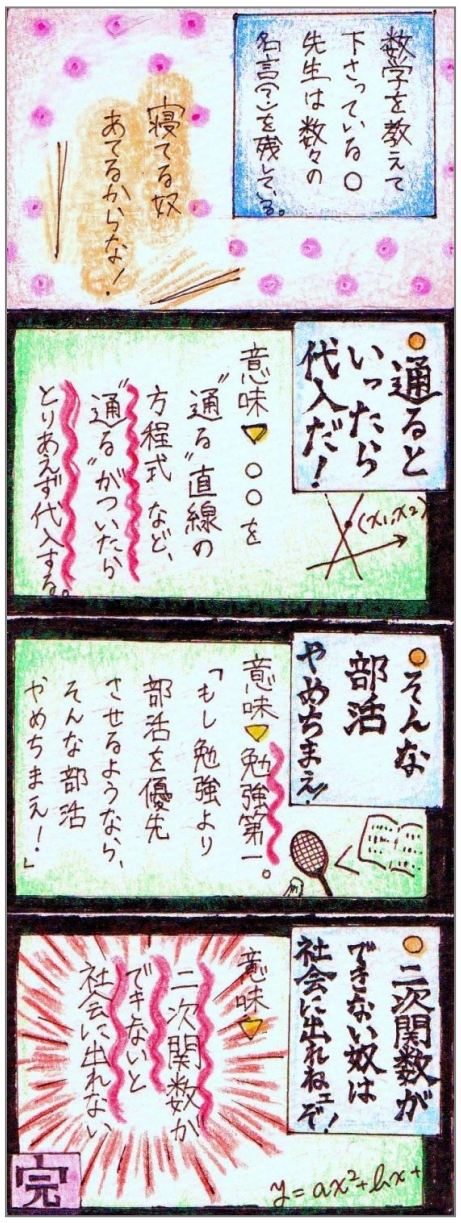


「東京バンドワゴン」
小路幸也著
集英社刊

２人目は小路幸也さんです。小路さんは旭川に生まれ現在は江別市に住んでいます。著書にはドラマ化された「東京バンドワゴン」シリーズや札幌を舞台にした「札幌アンダーソング」などがあり、作家を目指すようになったきっかけは「自分だけのものを作りたい」という気持ち１つだったそうです。

この他にもたくさんの著名な北海道出身の作家がいます。同じ出身地だと親近感が湧きませんか？ぜひ読んでみてください。

局員の日常



局員のおすすめ

「絶望名人カフカの人生論 」
(新潮文庫刊)
フランツ カフカ(著),
頭木 弘樹(訳)

この本は、カフカが残した愚痴と、それについての解説がまとめられた一冊です。

パラパラとページをめくってみるだけでも、カフカが日常生活のあらゆるものに不安を抱いていたのが分かりました。彼の感じる不安は、明らかに普通の人とは違います。

こんな一文があります。「ミルクのコップを口のところに持ち上げるのさえ怖くなります。そのコップが、目の前で砕け散り、破片が顔に飛んでくることも、起きないとは限らないからです。」ミルクを飲むことにも不安を感じています。たぶん、普通の人なら軽く受けとめる不幸を、彼は重く受けとめているんでしょう。だからこそ、彼の言葉は僕達が落ち込んでいるときに救いになってくれると思います。「カフカと比べたら、自分はましな方だ」と思えるんじゃないでしょうか。

落ち込んでいる時こそ、この本の出番です。この本の言葉を知っていれば、きっと元気が出ると思います。

あの人気作品が帰ってくる！

ハリーポッターのスピンオフ作品
「幻の動物とその生息地」
の公開日が決定した。

舞台は
ハリーポッターシリーズから
約 70 年前のニューヨーク、

ホグワーツ魔法学校の教科書「幻の動物とその生息地」を執筆し、魔法省の職員である「ニュート・スキャマンダー」を主人公として物語が進んでいきます。

映画の脚本は、ハリーポッターの作者でもある「J・K ローリング」が担当します。公開はアメリカで 2016 年 11 月 18 日にパート１・2018 年にパート２・2020 年にパート３となっています。大人気作品なので公開が待ち遠しいです！

ちなみに、魔法学校の教科書「幻の動物とその生息地」、本校図書館にあります。

芸術の秋

木々が色づき、季節は秋。
秋といえば、「読書の秋」や「食欲の秋」などたくさんの秋を聞いたことがありますが、今回は「芸術の秋」ということで、秋に札幌で開催される美術作品展の紹介をしたいと思います。

スイスデザイン展　9月9日～11月8日
札幌芸術の森美術館　札幌市南区芸術の森2－75
今年で日本とスイスの国交樹立150年それに合わせて開催されるスイスデザイン展。スイスのデザインは世界的にとても人気が高く「スイスブランド」ともよばれています。日常で何気なく見ているデザインももしかするとスイスブランドだったりするかもしれません。

ゴッホ　モザイクガ　ラス絵画展　9月8日～12月7日
北ヴェネツィア美術館　小樽市堺町5－27
誰もが知る「ひまわり」の作者である、フィンセント・ヴァン・ゴッホの名作をモチーフにしたモザイク絵画を26作品見ることができます。ガラスを使っているのでゴッホの作品の新しい魅力が発見できそうです。

くまのプーさん展　10月10日～11月3日
JRタワープラニスホール札幌市中央区北５条西２丁目エスタ 11F
世界中で愛されている「くまのプーさん」にフォーカスした初の企画展。その魅力と歴史を語る初公開作品など約350点を展示！みなさんにも馴染みがあると思うのでぜひ、見てみてください。